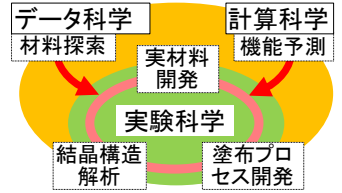


・研究目的・概要

有機材料は、構成する分子および集合体の多様性により、それらが示す多彩な物性という観点から学術的な興味をもたれていることはもちろんのこと、デバイス開発の材料としても応用面から大きな注目を集めている。機能高度化のための最適作成条件の探索は広く行われるが、新規分子の開発を含む基礎的な理解から機能発現を最適化するという部分は、とすれば後回しにされがちである。最近ではこれらの機能性有機物を用い、高品質な薄膜の作製技術が発展し、構造と物性を対応づけた議論が行えるようになってきた。一方で、有機分子材料は分子の設計自由度に加え、集合形態の自由度が高く、集合化することではじめて物性が確立する集合体では、物性の最適化と材料設計の間に直接的な相関をもたせることが困難である。このギャップを埋めるために、既存のデータベースおよび理論計算を活用し、新規材料探索を効率よく進め、新規有機エレクトロニクス材料の探索を加速することを目的として研究を推進している。

・実験ステーション: PF BL-7C, 8A, 8B, 4C

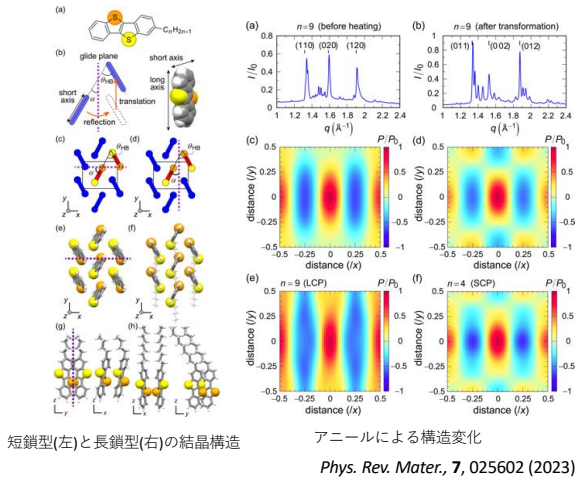


・2022年度の進捗状況

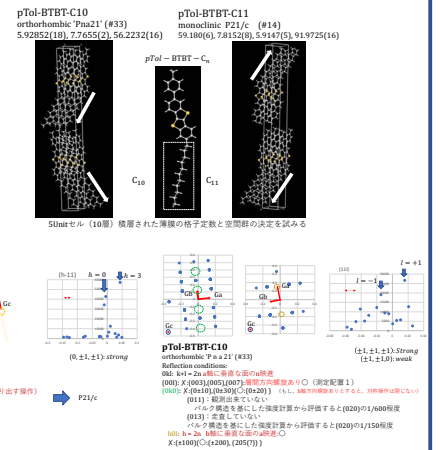
基板の上に作製された薄膜試料に対する構造解析

・ mono-BTBT-Cn

アニールにより、長鎖型から短鎖型へ構造相転移
構造相転移に伴い、移動度も大きく変化することから、構造と特性に大きな関連があると考えられる。
構造相転移に伴い、結晶性が劣化し、回折ピークがブロードになり、相転移後の構造決定が困難



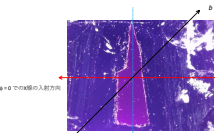
・ pTol-BTBT-Cn
薄膜試料の回折



電極界面における有機半導体薄膜の構造乱れ

ボトムコンタクト型とトップコンタクト型FETにおいて、一部の有機半導体では大きく性能が異なる。
この原因を明らかにするために、3種類の薄膜を用いて薄膜面内の回折ピークについて調べた。

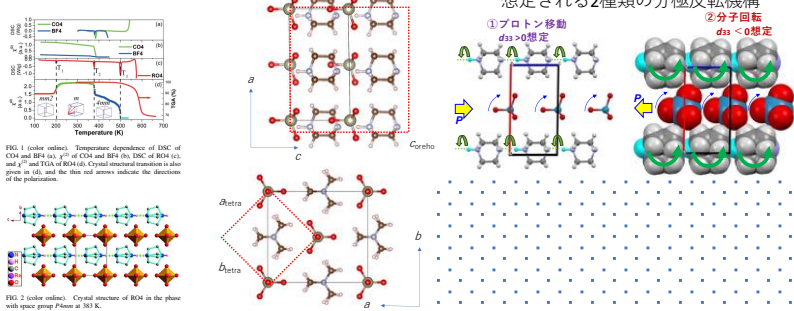
経時変化の観測



基板の形状によるバックグラウンド

有機強誘電体の分極起源の解明

(Hdabco)(ReO₄):



1) S. Arai *et al.*, *Phys. Rev. Mater.*, **7**, 025602 (2023). 2) K. Nikaido *et al.*, *Adv. Mater. Interfaces*, **9**, 2201789 (2022).
3) S. Matsuoka *et al.*, *J. Mater. Chem. C*, **10**, 16471-16479 (2022). 4) Y. Shimoi *et al.*, *J. Mater. Chem. C*, **10**, 10099-10105 (2022).